

田尾陽一様

すっかりご無沙汰してしまい申し訳もありません。

このたびは「飯舘村からの挑戦—自然との共生をめざして—」をご送付くださり誠に有難うございました。

300ページに余るこの大著は、新書版であるとはいえ、田尾さんのこの約10年間の深い思いがみなぎっていて、至るところから感じられる鮮明な問題意識に読者は圧倒されてしまいます。田尾さんが飯舘村で遭遇した菅野宗夫さん、その他の立派な方々たちと作り上げ、仕事してこられた「ふくしま再生の会」は、私どもから見ると本当に歴史的かつ重要な成果を数多く収めてきたことがよくわかります。わが国政府や東電などが前例のない事故の前で、明らかな責任逃れの行為が多かったのに比べ、田尾さんの歩まれた道は本当に茨の道であったにもかかわらず、具体的な成果に満ち満ちていたのはこの本からも明らかです。

田尾さんの揺らぐことのない覚悟もさることながら、東大で学ばれた専門領域がたまたま福島原発の悲劇を科学的な立場から把握するのにぴったりということもあったと思いますが、現代の日本が、ひいては世界が当面している原子力の持つ明らかな多面性が浮き彫りにされることになり、福島における大事故の場合には月並みな解決策を目指すことは決して許されないことになったことがよくわかります。飯舘村が東京からのアクセスなど色々な意味でとても恵まれた場所であったこともあって、そこで被った被害のもつ多面的な意味合いを際立ったものにし、日本国内外の多くの人々の注目と関心の的となることになりました。私は当時国連で働いていたこともあって、ウクライナのチェルノブイリに二度訪れましたが、田尾さんのおかげで、福島原発事故についても飯舘村訪問により本当によい学習の機会を得ることができました。

2017年4月に私どもが飯舘村を訪ねることができたのは、ユニークな勉強の機会でした。この本の至る所に出てくる人々は、読者の一人である私にとって生き生きとした証人であったのは幸いでした。

田尾さんの過去十年のお仕事や経験は、単に日本において意義深いものであるだけでなく、韓国などアジア諸国や、アメリカやヨーロッパ諸国の人々の注目を浴びたことも喜ぶべきことでした。福島原発の悲劇は、ともすると日本という内向きで表現下手な国の中で矮小化される危険があったのですが、幸いにして田尾さんのリーチの広がりのおかげで、国際的な色々な反応をもたらしたことは大変嬉しく、かつ大切なことだったと考えられます。

さらに嬉しかったのは、田尾さんの御本が飯舘村の村民の方々の言葉をふんだんに引用していることであり、この人たちの素朴で自然に表現した言葉の一つ一つが個々人の心の動きを如実に表現していることも注目に値するものでした。現代史の中で注目すべき原発事故の証人として、この村民の一人一人の発言は注目に値するものであり、それが少しずつ広がっていった物語を、田尾さんの筆が生き生きと表現していたことは大変幸いなことでした。この本はすでに朝日新聞、その他が書評で取り上げていますが、当然すぎることだったと考えます。言い換えると、この本は現代日本に生きる優れた一人の知識人でもあり科学者でもあった田尾陽一の哲学を生き生きと描き出している点で、幅広い読者層に読まれ、注目されているのは本当に嬉しいことです。

今の世界は益々対立も多くなり、政治や外交も複雑な局面を見せ、それだけに今まで以上に国境を越える国際協力や和解の力を必要としているのに、分断や衝突が激化している面も多くなってきていて、全く心の休まることがないのは残念なことですが、それだけに畏友田尾さんの益々のご自愛とこれまで以上のご活躍に期待申し上げることをお許し下さい。

明石 康